

■随想

大江磯吉の胸像建立

吉澤香代子 (高14回)

磯吉との出会い

上品な白髪、端正な顔立ち、そして静かに目を閉じながら流れる如く語り続け、作品を奥深く掘り下げていくその顔には、藤村が乗り移ったかと錯覚を覚えるくらいであり、神秘ささえも感じるほどでした。

それは、五十年前も前の私の大学時代の恩師・田中富次郎教授の講義の姿です。

今でも忘れることはありません。『夜明け前』『家』『新生』『破戒』……どの講義も、藤村自身の心の葛藤や苦悩を文学作品の奥に読み取っていく内容で、そこには家や社会の重圧、受け継いだ血の流れ、それらが渦巻いていました。

その中で『破戒』の授業の時、私にとって衝撃的なことがありました。それは、『破戒』の主人公の瀬川丑松や猪子連太郎のモデルは飯田市の隣、伊賀良村(現・飯



●よしざわ・かよこ

旧姓・北原、阿智村駒場出身、元小学校教諭、元高校講師、前飯田高校同窓会副会長(4期)、南信美術会会員、信州さきおりの会会員、趣味は茶道、機織り。

田市) 下殿岡出身の大江磯吉という実在の人物である」と教授の口から出た言葉でした。

私は耳を疑い、何かの間違いではないかと思いました。私の生まれ育った飯田地方では、同和問題など耳にしたことはありませんでしたから……。あの有名な『破戒』のモデルが飯田地方出身の人物だとは、私には全く信じられないことでした。

しかしその後、藤村と磯吉との接点を学ぶ中で、私は磯吉についてもっと調べていきたいと思うようになりました。本当に南信州出身の人物なのだろうか、磯吉とはどんな人物だったのだろうか、何が藤村の心を捕え突き動かした、あの名作を生み出すエネルギーとなったのだろうか。しかし、それから何年もの間、そのことを解明することは出来ませんでした。

あれから後、私は長い間磯吉に出会うことはなかった

のです。

その後、私と磯吉との出会いは、突然やってきました。長男の中学での学芸会の時です。活字が二行スライドで映し出されました。そこに磯吉という字が躍り出たのです。私はドキッとして、ついに会えたと思いました。それから徐々にでしたが、義務教育の中の同和教育の関係で、磯吉の名前が出てくるようになりました。しかし、それらのすべては、同和教育の目線から見た磯吉でした。私の心の中では、文学の世界からの磯吉も知りたかったのです。

『破戒』の中の磯吉

平成十一年、私が飯田高校同窓会の副会長という大役を仰せつかった時でした。民俗学者で、明治大学教授の故後藤総一郎先生（高4）の講演で、「同窓会の名簿に、大江磯吉の名前が載っていないが調べてほしい」との話があったのです。私は役員会の折に、『破戒』の本を手に、調べたい旨を述べさせていただきました。

その後、第43号の同窓会報に「『破戒』——磯吉——同窓生？」というタイトルで記事を投稿し、翌年には名簿製作委員会担当で、名簿作成に携わることになりました。

まず学校長から明治時代の学籍簿をお借りして、調べ

始めてみました。そこに、百二十年もの眠りから醒めたかのように、「磯吉」の名前を発見することが出来ました。飯田中学の前身である、公立下伊那中学校の第一回の入学生として、「小平磯吉」の名前で、明治十七年九月十日入校と書かれており、身元保証人は大江周八と矢澤龜次郎となっておりました。小平の姓になっていることについては諸説ありますが、ここでは省略することにします。とうとう『破戒』——磯吉——同窓生という一直線につながることが出来ました。あの「破戒」のモデルは南信州出身の人物であり、さらに飯田高校前身の出身者だった！と、私は胸をドキドキさせながらその時、大きな感動を覚えました。

平成十三年発行の、ピンク色の表紙の会員名簿に磯吉の名前を載せることが出来ました。私は、大きな仕事が出来たという思いと同時に、「これを同窓生たちに語り継いでいかねば」と、思いました。

胸像建立の提案

平成十五年一月のある日のこと、同窓会の役員会終了後、当時の事務局長・故宮下洸さん（高3）に、私は「大江磯吉という人は、校内に銅像を建ててもよいくらいの人物ですよ」と切り出しました。宮下さんは「そうだ、

その通りだ。実行委員会を組んでやろう」と言い出されました。そして二、三日後、「言い出しっぱだから、吉澤さんが実行委員長になってくれないか」という電話をいただきましたが、「私にはそんな力はありませんので」とお断りしました。

その後、委員長に片桐弘彰さん（高5）、副委員長に平澤秀明さん（高4）をお願いすることができました。お二人と私との三人の発起人が、請願書を添えて当時の校長・坂巻道弘先生（高18）の所へお願いに行きました。校長先生も即座に賛成して下さいました。そして県の方へ問い合わせをして下さいました。

こうして、四月に第一回目の実行委員会が開催となり、「大江磯吉の胸像建立の会」と名付けられました。県からの回答は「個人の銅像を学校の敷地内に建立するのは好ましくない」とのことでした。そこで、飯田高校の前身である下伊那郡立飯田中学校のあった永昌院を候補として、お願いに行ったのですが、後日、お断りがありました。次にやはり所縁のある専照寺に、その候補としてお願いに行きましたが、そこでも断られてしまいました。

二転三転して、やっと決まったのが、磯吉を通った伊賀良の知止小校の後の円通寺ということになりました。

ここは、片桐委員長が檀家を兼任しているお寺ということもあり、ほっとしたところです。あちらこちらの学校を追われて行った磯吉の人生と同じように、建立する場所も翻弄され続けましたが、結果的には適所に落ち着いた感がありました。

会合はその後三十回ほどにも及び、宮下事務局長も大変奔走して下さいました。募金額も予定よりはるかに多く、百九十人以上の方のご協力があり、二百万円を上回りました。製作は南島和也さん（高43）にお願ひし、台石の裏には協力者の芳名も刻みました。除幕式は当初の予定から一ヶ月遅れましたが、平成十五年十月七日、円通寺にて八十人近い方のご参列の許、大盛況のうちに執り行うことが出来ました。

その頃、退職記念として久保田寛人（高13）さんの発案で、飯田下伊那の退職教員の方々が、磯吉の胸像を下伊那教育会館に寄贈し、同じく伊賀良の小学校でもPTAが中心となり胸像を設置しました。

さらにその翌年には、小澤廣人（高17）さんの立ち上げた「演劇宿」が、『夢・大江磯吉の』（作・演出…ふじたあさや）を上演しました。私もその実行委員として参加させて頂きましたが、四公演で三七〇〇人もの方々が観劇して下さい大変驚きました。

不思議なことに、それらの出発点は全く横の繋がりのない中でしたが、大江磯吉没後百年ということを機に、それぞれの人の想いが同時に沸き起こり、磯吉ブームが起こっていったのだと思います。

「大江の会」

その後二十人程で行ってきた「大江磯吉建立の会」は、「大江の会」と名称を変更し、磯吉の命日の九月七日の前後に顕彰活動を続けることになりました。地元の方々とも一緒に、講演やらスピーチなどして回を重ねてきましたが、昨年平成二十五年九月、「大江の会」の事務局長をしていた矢



大江磯吉の胸像ができて上がった時。
南島和也さん制作

大江磯吉・略歴

慶応4年(1868)	下殿岡にて父周八・母志の二男として誕生
明治11年(1878)	知止小校(下等科3年)を抜群の成績で卒業
〃	〃 9月、飯田小校(現追手町小)上等科に入学
〃14年(1881)	同科卒業、9月同校下等科助教に採用
〃15年(1882)	6月、公立下伊那中学校(永昌院)に進学
〃16年(1883)	7月、下伊那中学校は専照寺に移る
〃18年(1885)	7月、長野県中学校飯田支校第1回生として最優秀の成績で卒業
〃	〃 9月、長野県師範学校高等師範科に編入学
〃19年(1886)	卒業、諏訪郡平野学校訓導として赴任。(排斥により師範学校助教諭となる)
〃20年(1887)	5月、長野県尋常師範学校付属小学校訓導
〃21年(1888)	同校在任のまま、高等師範学校に入学
〃24年(1891)	長野県尋常師範学校教諭に採用される
〃25年(1892)	付属小学校主事。師範学校教諭職排斥運動起こる
〃26年(1893)	大阪府尋常師範学校教諭に転任。神谷つまと結婚。論文「拒反の情」発表
〃27年(1894)	師範学校生徒の「身元調べ」から、追放運動起こる
〃28年(1895)	鳥取県尋常師範学校教諭・付属小学校主事兼務。論文「自由と抑制」発表
〃30年(1897)	師範学校舎監兼任。論文「五段教授法につきて」「教育の主義」発表
〃33年(1900)	鳥取県小学校教員検定常任委員。叙「正八位」。舎監長罷免、休職となる
〃34年(1901)	兵庫県柏原中学校長に復職。叙「従七位」
〃35年(1902)	5月、東京の全国中学校長会議に出席
〃	〃 7月、重病の母の看護のため帰郷
〃	〃 8月、流行の腸チフスに感染
〃	〃 9月5日死去、享年35歳

澤興重(高10)さんの提案で、諸事情により解散することになりました。その後は、伊賀良公民館で資料を展示、管理していくことになり、今日に至っています。初めて大江磯吉の名を耳にしてから、もう五十年以上も経ってしまいましたが、『破戒』のモデルである大江磯吉、差別と戦い続けた大江磯吉、偉大なる教育者である大江磯吉——この郷土の偉人の胸像を、多くの方々のお力で建立できたことは、本当に嬉しいことでした。ありがとうございます。